

賦一けれが。藤吉幾遭推原き。雀踊りて敵びく。之網小朝ハ
 謂けるや。人元服と加ふる响り。實名も共ふ付るとやら。父より
 是と語り少き。某も亦何とくいの。實名附て願ふやと。听て之網
 厥もいらん。文字小望とや有と問ふ。然侍吾父ハ昌吉と号す
 るれが其文字小。應ある名とを晞し然らば父の一字小據り
 高吉と号すべし。汝が産まじ地るれが中村とて姓と為よとく。
 中村藤吉即高吉と。姓名致て熟備せり。年の長るふ隨て愈々
 増く懈りあく。軍学兵法小耳目と烈す。日々練武場小伺候
 して。飲食と忘き見物せり。茲小川寫宇一といふ。松下の門人より
 ける。性質血氣の揣男あて。常日の起居言謂がま傍ふ人多き
 若し。連日小中村藤吉が。鍊兵場へ來て見物まると。坐小揺て

謂けるや。這一方さるざる道場。子輩の扱る場あらき。快
 退よと一又。武藝と覚ゆる心やある。有るら來き教くふ見ん。
 些の痛き面苦き面も。忍び堪ゆる骨多けれが。藝道鍊達
 がしと。意根悪く言盤ま。藤吉即もおのれと懐へと。其の顔色
 小露さま。宇一小向て辞と軟げ。鍊武做とて小觀るあらき。這
 道場小在るうち。さ何れも心健く。壽るやう小思ふ故日見
 物しつるまると。いの川嶋。厥計小思も。学小て昇連速くま。
 一刃我と刀合あて。試せと木太刀と差付。強付まとも這方ハ卑下
 なる。いらく貴公小及んや。刀合とて赦されと。辞退すれともり
 くる容くま。川寫の弱味小乗。斯ハ臆病ある根性くる斯る
 崩輩ハ這場小置れま。疾退去とと利着られ。藤吉莞余と笑